SNOW GINZA

written by **HADEYA**

https://music.youtube.com/watch?v=kSYhDi8r2-w&si=t0CqLPrOyJCezEX8

1

「お前の家族……惨殺されたんだ」

少し間を置いて、俺は問うた。

「……どうやって」

「撲殺、だそうだ」

「何か言い残したか？」

「頑張って、と。お悔やみ申し上げる」

「ああ……」

二月。雪の降る夜。寒い寒い夜だった。

スマートフォンを出した。彼女に電話で連絡を入れる。

……今、思えば、彼女は俺自身だったのかも知れない。俺自身の味方にして、敵。絞り出すべき俺の沸点。

通話ボタンを押した。

「……もしもし？」

「俺の家族は殺された」

「はあ？」

「撲殺だ。皆殺し。最期の言葉に———」

「どうしたの？ また陽気になっちゃった？」

「———未練は感じられなかった」

笑う。悪魔が笑う。心に遣るせなさが突き刺さる。

横殴りの雪が舞う。上空を見上げた。俺は罵った。唾を撒き散らしながら。夜空に向け、感情を剥き出しにする。牙を剥いて、襲い掛かる。

「母は何の罪も犯していない善良な市民だった。殴り殺された。ヤクザに。さぞかし無念だったろうよ」

「どうしちゃったの？ また陽気になっちゃった？」

その一言がトリガーだった。周囲を静寂が包み込む。ピアノの旋律が聞こえる。旋律は徐々に高まり、激しくなって行く。ボルテージが上がって行くのを感じる。ヒリヒリ、と。感情が高揚する。俺の我慢は……もはや限界だ。

叫んだ。銀座の交差点、神の国の爆心地で。

腹の底から叫んだ。目は血走り、牙が生える。腹の底からマグマが込み上げる。

高速で蘇る記憶。垣間見た。生活の断片で見せる、母の笑顔を。屈託がなく、何かを信じている。その眼差しは素朴だ。素朴に信じている。自分自身を。自分にとって大切なモノを。掛け替えのない———美徳を。

美徳。母が何を信じていたかは分からない。俺は……俺は……

叫んだ。銀座のド真ん中で。天に向かって、唾を吐く。

＊

ピアノの旋律が聴こえる。嘘偽りのない極上の旋律が。
彼女は敵に闘いを挑んでいた。自分自身の世界を汚す邪悪に立ち向かっている。
彼女が最期に選んだ曲はショパン。繊細な、この上なく繊細な魂の叫び。
牙を剥いて、襲い掛かる。鬼の形相で飛び掛かる。

……駄目だ……もはや限界だ。叫び、終止符を打つ。

叫びは海を越え、空を駆け巡る。その晩、大勢が上空から叫びを聴いた。叫びは一人の人間に届いた。
彼女は満たされて死んだに違いない。
確かに聴いた。俺は。彼女の叫びを。

俺の感情は爆発した。渾身の力で俺はメルセデスベンツをブン殴った。拳の強度はオリハルコン。
メルセデスは無残に、木っ端微塵に破壊された。それでも怒りは収まらない。煮え滾るマグマが爆発する。

俺の目を見ろ……49年間を共に生きた、俺の〈目〉を見ろ。（了）

キリミハデヤ
hadeyakirimi@gmail.com
81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ　口座番号
三井住友銀行（店番号**232**）　普通口座　口座番号：**7342872**